陶淵明「擬古」九首〈其三〉の詩の寓意について

沼口　勝

一

陶淵明（三六五―四二七）は、東晋（三一七―四二〇）の後半から宋初にかけての争乱の時期を生きた人である。その連作「擬古」九首中には、衰微の一途をたどった東晋王室の命運や時事などについての見解と感慨とを、寓意的に表出する詩が多く含まれているようである。

ところで「擬古」に限らず、陶淵明には寓意を意図したと思われる作品が多い。しかしその寓意の具体的な所在という点になると、諸説聚訟して帰結するところを知らないのが、従来の傾向であった。そうした結果を招いてきた原因として、作者の用いる寓意の手法が、まだ十分に解明されていないことが考えられる。

卑見によれば、陶淵明がその寓意に多用する手法として、漢・焦贛撰と伝える『易林』中の繇辞や、『周易』の卦爻の辞とそれに対する魏・王弼注のことばの使用を挙げることができる。[1] そしてさらにこれに加えて、新たに次のような点を指摘したい。

すなわち陶淵明の作品にはかなり多くの呉声歌曲・西曲歌（以下、呉歌・西曲と略称）の歌辞と共通もしくは類似した措辞が認められ、それらの中には明らかに寓意の手法として用いたのではないかと見なされるもののあることである。ことに「擬古」と呉歌・西曲との関連は深く、連作九首中の過半の詩にそうした措辞が認められる。

小稿は、「擬古」〈其三〉の詩（以下、〈其三〉と略称）について、まずその寓意に関する従来の諸説を検討し、次いでそこに見られる呉歌・西曲の歌辞との関連を指摘し、さらに作者の寓意の手法および寓意の所在について考察を加えるものである。

二

〈其三〉の全文を左に掲げる。

仲春遘時雨　始雷発東隅
衆蟄各潛駭　草木従横舒
翩翩新来燕　双双入我廬
先巣故尚在　相将還旧居
自従分別来　門庭日荒蕪
我心固匪石　君情定何如

仲春　時雨に遘い
始雷　東隅に発す
衆蟄　各〻潛み駭き
草木　従横に舒ぶ
翩翩たり　新来の燕
双双として我が廬に入る
先巣　故より尚お在り
相将に旧居に還る
分別してより　来
門庭　日〻に荒蕪す
我が心　固より石に匪ず
君の情　定して何如

五言十二句からなる右の詩は、その内容から各四句の三段落に分かれる。第一段落は仲春二月の景物である時雨・春雷・啓蟄・草木の生育を詠い、第二段落においてわが廬に飛来したつがいの燕たちが、やがて旧居にもどっていったことをいい、第三段落で燕たちと別れてからわが廬の門庭も荒蕪に帰したこと、そしてわが心は変らないが、きみたちの心情はどうなのかと問いかけて結んでいる。

龔斌『陶淵明集校箋』（一九九六年、上海古籍出版社）の〈其三〉についての〔集説〕に、この詩の主旨に関して、従来次の四説が行われてきたことをいう。すなわち、

㈠　燕が旧巣を恋うることを以て、晋室を背棄することを肯んじない作者の心情を託したとする説（呉師道『呉礼部詩話』云〻「託言不背棄之意。」邱嘉穂『東山草堂陶詩箋』巻四云、「自劉裕簒晋、天下靡然従之、如衆蟄草木之赴雷雨、而陶公独惓惓晋室、如新燕之恋旧巣、雖門庭荒蕪、而此心不可転也。」孫人竜亦同此説。）

㈡　劉裕の宋に仕える者を譏ったとする説（馬墳『陶詩本義』巻四云、「此首似譏仕宋者之不如燕也。」）

㈢　辺境に従役する夫を懐う作とする説。（張玉穀『古詩賞析』巻十四云、「此擬春閨懐遠之詩。」）

㈣　劉裕が簒奪者桓玄に対し同志とともに義兵を挙げたことを詠ずるとする説。これは民国・古直『陶靖節詩箋』（一九六四年、広文書局）の説で、逯欽立校注『陶淵明集』（一九七九年、中華書局）は古直の注釈を襲いつつ、説としてはやや異なる。

以上の諸説の中、後述する〈其三〉の寓意の解明において参考とすべきは、第三、第四の両説、ことに後者であ

る。ここではまず古直および逯欽立の解釈を取りあげて、説明し検討を加えたい。

前述のように、〈其三〉を、桓玄に対する劉裕の義挙を寓意するものとするのが古直の解釈である。その方法は例えば、「晋書の元興三年二月、劉裕と何無忌と起つ、京口は建康の東に在り、故に曰く、仲春時雨に遘い、始雷東隅に発す、と」というように、史実を挙げてそれがいかなる理由で詩句に結びつくのかを説くのである。

ところで古直の摘記する史書の記述は、必ずしも『晋書』（唐・房玄齢等撰）の本文のとおりではなく、また断片的でもある。そこで当該史実の経緯を知り、古直の注釈を理解するために、『宋書』（梁・沈約撰）、『晋書』、『資治通鑑』（宋・司馬光撰）などの史書を参照して、桓玄のいわゆる「偽楚の乱」（宋・袁枢撰『通鑑紀事本末』の篇題）の顚末を述べてみたい。

東晋の元興元年（四〇二）正月、尚書令司馬元顕はかねてから対立していた荆州刺史桓玄を討つべく戒厳令を布く。これを聞いた玄も元顕の罪を挙げ、兵を率いて東下する。二月、玄は都建康に近い姑孰（こじゅく）に至り、戦端が開かれ、政府軍の司馬尚之・司馬休之が敗れる。三月、政府軍の主力北府軍団の長劉牢之が元顕を裏切り玄に寝がえる。玄は建康を制圧、太傅司馬道子（元顕の父）を廃し、元顕を斬る。また、北府軍団長を解任された牢之はあらためて玄を討とうとするが、すでに部将たちは分散して企ては成らず、逃亡の途中自殺する。

劉牢之の失脚後、その部将劉裕は桓玄の従兄桓脩の参軍となり、五斗米道徒孫恩の一党盧循討伐に従事してこれを敗走させ、翌元興二年（四〇三）六月、彭城内史を加えらる。同年十二月、玄はついに帝位に即き、国号を楚とし、安帝を廃して平固王とし、その弟司馬徳文（後の恭帝）とともに尋陽に遷す。なお、当時尋陽郡の治は、陶淵明の故郷柴桑にあったと、『通鑑』の胡三省註にいう。

桓玄の簒奪を見届けた劉裕が劉牢之の甥の何無忌と語らい、晋室興復の義兵を挙げたのは、元興三年（四〇四）二月のことである。義挙に参画したのは劉裕・何無忌の外、裕の弟道規・劉毅・孟昶・魏詠之・檀憑之・諸葛長民・王元徳・辛扈興・童厚之らとその兄弟親戚などであった。そして劉道規・孟昶・劉毅が広陵において、また諸葛長民が歴陽で、さらに王元徳・辛扈興・童厚之らが建康で、それぞれ京口城（鎮江市）における劉裕の挙兵と呼応し一斉に蜂起したのである。

三月、劉裕が桓玄の驍将呉甫之・皇甫敷を斬り、玄の衆

は潰えて逃奔する。建康に入った裕は、玄の宗族を誅し、武陵王司馬遵を天子の代行とし、諸将に玄追討を命じた。

一方桓玄は、尋陽に幽閉しておいた安帝を伴って江陵に逃れ、体勢を立て直すと再び長江を東下し、崢嶸洲（湖北省鄂州市の北）で劉毅と遭遇して戦い大敗を喫し、再度江陵に帰り、さらに西に逃れようとする途中、枚回洲（江陵県の西）で殺された。時に元興三年五月のことである。これより前、安帝らは救出され江陵にあったが、義熙元年（四〇五）三月甲午、建康に帰還、復辟した。

次に右の事迹を踏まえて、古直の解釈を見ることとしよう。

すでに述べたように〈其三〉の冒頭の二句は、元興三年の二月に劉裕らの義挙が京口において口火を切ったことを寓意するという。

そして続く第三・四句「衆蟄各潜駭、草木従横舒」とは、広陵・歴陽・建康において、劉裕の同志たちが一斉に蜂起したことをいうものとする。

さらに第二段落「翩翩新来燕、双双入我廬、先巣故尚在、相将還旧居」とは、桓玄が敗れ、劉裕が晋室を興復し、安帝が建康に帰還したことをいうものであるとし、「玄を旧燕と為す、故に裕等を新燕と為す、双双とは其の一に非ざるを言うなり」と解釈する。劉裕らを新来の燕に譬えるその理由を、古直は次のように説明する。

案ずるに裕は嘗て下邳太守為りと雖も、然れども局外の小臣にして、未だ朝政を聞かず、之を譬えれば林に巣くう燕の、未だ人家の画梁に居らざるがごとし。故に無忌の毅に謂いて曰く、天下草沢の中、英雄無きにしも非ずと。之を新来の燕と謂いし所以なり。

劉裕が下邳太守となったのは隆安五年（四〇一）八月で、この時、孫恩を破る大功を立てているが、朝政とは無縁の小臣であった。義挙を図る際、何無忌が劉毅に対し、暗に裕のことを「草沢中の英雄」に擬したことばにもそれが表れており、だから人家の画梁に巣くったことのない林中の燕に譬え、これを「新来の燕」と称したのであるという。

第三段落、「自従分別来、門庭日荒蕪、我心固匪石、君情定何如」の四句の解釈について、次のようにいう。

義熙元年三月、靖節　建威将軍の為に都に使いす。八月、彭沢の令と為り、十一月、帰らんことを賦す。此れより以後、田里に老死するまで、復た都に至らず。而して晋室も亦た寖く衰え寖く微にして、以て亡ぶるに至る、故に曰く、「分別してより来、門庭日に荒蕪

す」と。

宋書の本伝に曰く、潛自ら曾祖晋世の宰輔なるを以て、復た身を後代に屈するを恥ず、と。故に曰く、「我が心固り石に匪ず」と。其の故人顔延之等の如き勉めて新朝に事うる者尚お多し、故に曰く、「君の情定めて何如」と。

陶淵明は、元興三年に鎮軍将軍劉裕の参軍としてその下にあったが、翌年の義熙元年三月に建威将軍劉敬先の参軍として都に使いし、その八月に彭沢県の令となり、十一月に武昌（江西省）の程氏に嫁した妹の訃報を口実に辞任し、郷里に隠退した。その間の心境が「帰去来兮辞」に写されていることは周知のとおりである。古直によれば、第九・十句は作者が官を辞してより、晋室が次第に衰微し滅亡に至ることを指すのだという。

さらに『宋書』「隠逸伝」の本伝にいうように、曾祖陶侃が宰相であったから、自身は宋朝に仕えるのを恥じとし、また若い友人顔延之（三八四―四五六）らが新朝に仕えるのを喜ばなかった、それが末尾二句の意であるとする。

次に逯欽立の解釈を見ることとしよう。それはまず、「二月の春雷を以て劉裕の二月義兵を挙ぐるに喩う」と解する点で古直の説を襲うものといえよう。しかし、「『翩翩たる新来の燕』の二句は、晋の安帝兄弟の尋陽に遷さるるに喩う」といい、また『先巣故より尚お在り』の二句は、「晋の安帝の復辟して京師に返るに喩う」といい、さらに『宋書』「武帝紀」の記事を引き、次のように解する点で古直と異なる。

晋の安帝　宋公の爵を進めて王と為し、詔して曰く、「相国宋公、朕を巣幕より拯い、霊命を已に崩れたるに廻らす、」と。陶の巣燕を以て晋の安帝に比するは、此れと同じきなり。

右の「武帝紀」に引く安帝の詔にいう「巣幕」の語は、いうまでもなく『春秋左氏伝』襄公二十九年、季札が衛から晋に行き、孫文子の封邑戚に宿ろうとして鐘声を聞き、国君の咎めを受けて謹慎の身の孫文子が音楽をたのしむとはなにごとかといい、「夫子の此に在るや、猶お燕の幕の上に巣くうがごとし」といったのに拠る。帳幕（テント）に巣を造った燕はいつ巣を撤去されるか知れない危険な運命にある。そうした運命にさらされていることを「巣幕」という。逯欽立は安帝の詔のことばから、詩中の燕を安帝の比喩と解したのである。

以上、〈其三〉の詩について古直と逯欽立の解釈を、史

実と照合しつつ見てきた。これを整理検討すると、次のような問題点が残る。

第一段落の四句を劉裕の義挙の寓意と解するキーワードは、「仲春」「東隅」の語であるが、他にさらに確実な論拠がないのか。

第二段落の「新来燕」を劉裕、また安帝の比喩とすると、「双双入」という表現に見合う事実があるのだろうか。また、「先巣」と「旧居」とに対応する場所は具体的にどこであるのか。

第三段落の「門庭」の語は、第六句の「我廬」と対応して同一の所在を指すと考えられるが、それは尋陽と建康のいずれなのか。あるいはそれらとは異なることがらを指すのか。

右の諸点を解明するために、次に〈其三〉と呉歌・西曲との関連に検討を加えたい。

三

周知のように呉歌と西曲は、ともに南朝時代に流行した歌曲で、その多くは庶民または異民族の間に発生した歌謡を母体とし、主として男女間の愛情を五言四句の形式を用いて唱うものである。呉歌と西曲とを分かつ点は、呉歌が東晋以後、建康を中心とする長江下流の地域に発生、流行した歌であるのに対し、西曲は宋以後、江陵を中心とする長江中流域と漢水の両岸を含む広大な地域に発生し、その主要な部分は舞曲である点に特色があるといわれている。[22]

ところで陶淵明の作品中には、「庚子歳五月中従都還阻風於規林」（四〇〇年）、「辛丑歳七月赴仮還江陵夜行塗口」（四〇一年）、「乙巳歳三月為建威参軍使都経銭渓」（四〇五年）、および「始作鎮軍参軍経曲阿作」と題する諸詩があり、作者がその生涯において幾度か都建康と江陵に赴任または使いした事実を語っている。換言すれば陶淵明は、呉歌の故郷建康と西曲の中心地となる江陵で、その耳で呉歌を聞き、また初期の西曲が歌舞されるのを見聞する機会をもち得たはずである。そもそも彼の故郷尋陽は、西曲発生の一地域である。

陶淵明が呉歌を愛好したであろうことを、おそらく初めて示唆したのは魯迅（一八八一―一九三六）である。

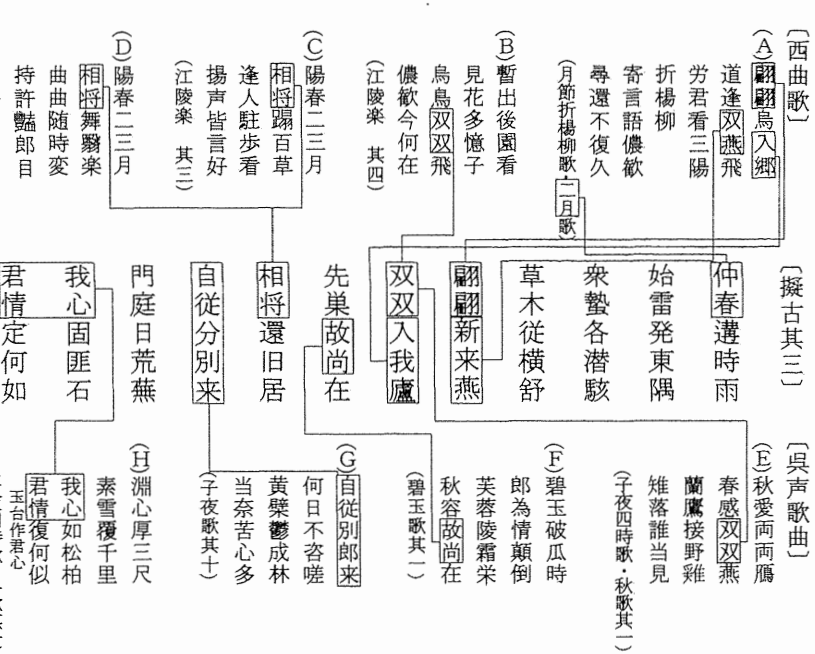
> 読者的読選本、自以為是由此得了古人文筆的精華的、殊不知卻被選者縮小了眼界、即以文選為例罷、……不収陶潜閑情賦、掩去了他也是一個既取民間子夜歌意、而又拒以聖道的迂士。（一九三三年、『集外集』所収の「選本」）

「子夜歌」を代表とする呉歌のみならず、西曲中の一部の歌をも陶淵明は受容していたであろうとするのが、筆者の推測である。その根拠は、後述する西曲の「月節折楊柳歌」と〈其三〉との間に認められる深い関連性にある。

ここで〈其三〉およびそれとの間に共通もしくは類似の措辞をもつ呉歌・西曲の歌辞を掲げ、両者間の関連を図示する（下図参照）。

この図によって一目瞭然であるが、〈其三〉全十二句中実に八句の措辞に、呉歌・西曲と共通もしくは類似のそれが認められる。そしてこの中、「故尚」「相将」「自従……来」などの語については、〈其三〉が図中の呉歌・西曲の歌辞から借用したとする必要はないであろう。これらはいずれも中国古典語の品詞（大別して実字・虚字・助字の三類に分かれる）[13]として助字に属することばであり、当時小説や民歌に広く用いられていた白話的な語彙と考えられる。陶淵明はこれらを用いることで、〈其三〉に民歌的口調を与えようとしたのであろう。

これに対して「月節折楊柳歌・二月歌」「子夜四時歌・冬歌其一」の二首と〈其三〉との場合、両者の間に見られる表現上・内容上の類似から判断して、陶淵明がこの二首の歌辞を愛好し、それをいわば換骨奪胎した作が〈其三〉



ではないかと推測する。

以下に〈其三〉と呉歌・西曲に共通する措辞について説明しよう。

第五句の「翩翩」は、軽快に飛ぶさま。第六句の「双双」は、一対ずつの意で、(E)「秋には両両の雁を愛せしも、春には双双の燕を感しむ」(B)「烏鳥双双として飛ぶ、儂が歓は今何くにか在る」というように、つがいの鳥を見て孤独な今のわが身を歎くのに用いる。

第七句の「故尚」は、もとのまま・あいかわらずの意。(F)においては、霜に負けず咲く木芙蓉の花のように、悲しみ愁える顔も笑顔とかわらぬ魅力があることをいう。詩語としての用例は「碧玉歌」が最も早く、〈其三〉がこれに次ぐようである。④

第八句の「相将」は、ともに・連れ立っての意。晋・石崇（二四九―三〇〇）の琴曲「思帰引」に「雁驚きて波を泝り群れて相将う」というのが、詩語としての早期の用例である。(C)「相将て百草を蹋む」(D)「相将て翳楽を舞う」とは、陽春人々が連れ立って野に出て舞踏することをいう。

「自従……来」（……より以来）という語も「子夜歌」に始まるようで、(G)「郎と別れてよりこのかた、何の日か咨嗟せざらん」の外に、「歓と別れてよりこのかた、奩器了に開かず」（子夜歌其四）があり、さらに「子夜四時歌」中に二例を求めることができる。

ところで第十一・十二句の「我心」と「君情」を対置して、自らの不動の心情をいい、相手の気持ちのいかんを問う句法は、(H)「我が心　松柏の如し、君の情　復た何にか似る」という歌辞の句法と類似する。これを陶淵明が「子夜四時歌・冬歌其一」の句法を踏襲した結果と解してよいものであろうか。

宋・郭茂倩『楽府詩集』巻四十四「子夜歌」の題解に引く唐・呉兢『楽府解題』に、「後人更めて四時行楽の詞を為る、これを子夜四時歌と謂う。……皆曲の変なり」といい、また「子夜四時歌」は「晋・宋・斉の辞なり」という。

王運熙「呉声西曲雑考」の「第四節　子夜変曲考」において次のようにいう。

在《子夜四時歌》産生之前、呉地的民歌、大約原有叫做《四時歌》的、後来《子夜》的声調盛行、文人楽工們就用它来製造《子夜四時歌》的楽曲了。（『楽府詩述論』所収）

おそらく「冬歌其一」は、右の呉地方の民歌「四時歌」

の旧歌辞をとどめている歌であろう。「冬歌其一」に限らず、「子夜四時歌」（七十五首）と陶淵明の作品との間には、多数の共通する措辞を見出すことができる。[15]「子夜四時歌」の原歌「四時歌」を陶淵明は享受する機会をもったと考えることができる。

以上の考察から、〈其三〉は呉歌・西曲の措辞を模して民歌調に作った詩であることが明らかとなった。そして前述の「春閨懐遠の詩に擬す」とする説もここに発している。

四

前章の図の(A)「月節折楊柳歌・二月歌」（以下「二月歌」と略称）は、〈其三〉の寓意を解く鍵となる歌と考えられる。その理由を次に説明しよう。

翩翩烏入郷　翩翩として烏（からす）　郷に入る
道逢双双燕　道に逢う　双双の燕
労君看三陽　君を労して三陽を看ん
折楊柳　折楊柳
寄言語儂歓　言を寄せて儂（わ）が歓（きみ）に語（つ）げん
尋還不復久　尋還（尋環）　復た久しからず

恋人の不在を嘆く女の歌である。楽しげに村里に入ってきた烏、道で出会ったつがいの燕たち、わたしもあなたとふたりして春を眺めたい、（楊柳の枝を折り）、遠征のわがきみにことづけする、めぐる季節は長くはとどまっていないのだからと。

さて、右の第三句の「三陽」は、旧暦の正月を指すことばであるが、「子夜四時歌」に見える次のような例からすると、春一般を指すものと解される。

適憶三陽初　適（たまた）ま憶いしは三陽の初め
今已九秋暮　今は已に九秋の暮れ
（秋歌其五）

別在三陽初　別れしは三陽の初めに在り
望還九秋暮　還りを望む　九秋の暮れ
（秋歌其十八）

適見三陽日　適（まみ）ま見えしは三陽の日
寒蟬已復鳴　寒蟬　已に復た鳴く
（冬歌其十七）

また第六句の「尋還」は「尋環」と書くのが正しく、「循環」と同義の語である。

この歌が「二月歌」であり、〈其三〉の冒頭の「仲春」と季節を同じくし、また「翩翩烏入郷、道逢双燕飛」の聯が、「翩翩新来燕、双双入我廬」と類似する

などの点からして、〈其三〉との間になんらかの関連をもつのではないかと疑われる。そしてそれは前述の「三陽」の語意を追究することにより明らかとなる。次にその点について考察する。

「二月歌」の「三陽」の語は、歌中においては春の季節を指すが、また周知のように『易』の八卦の一の「乾」(☰)を、それが三陽爻から成ることからいい、さらに例えば六十四卦の一の「恒」(䷟)の九二・九三・九四のような連続する三陽爻をいうことがある。

陶淵明がその寓意のための手法として、『易』の卦爻の辞やその王弼注を用いることはすでに指摘した。王弼注において「三陽」の語はどのように用いられているのであろうか。

「需」(䷄)の上六、「泰」(䷊)の初九、および「恒」(䷟)の九三の三箇所の爻辞の王弼注に「三陽」の語が用いられている。この中で〈其三〉の寓意を解く鍵と考えるのは、「泰」の卦爻の辞とその王弼注である。次にそれらの検討に入りたい。

䷊泰、小往大来、吉亨。

彖曰、泰小往大来、吉亨、則是天地交而万物通也。上下交而其志同也。内陽而外陰、内健而外順、内君子而外小人。君子道長、小人道消也。

泰は、小往き大来たる。吉にして亨る。

彖に曰く、泰は小往き大来たる、吉にして亨るとは、則ち是れ天地交わりて万物通ずるなり。上下交わりて其の志同じきなり。内陽にして外陰なり、内健にして外順なり、内君子にして外小人なり。君子は道長じ、小人は道消するなり。

「泰」の卦は、坤（陰・地・小）が外卦（上卦）に往き、乾（陽・天・大）が内卦（下卦）に来ているから、やがて下卦の三陽が象徴する陽気は上昇し、上卦の三陰が象徴する陰気は下降して、天地・陰陽が相和する時を迎えようとする。故に吉にして亨るのである。これを人事でいえば、君臣上下が意志疎通し国家安泰の時を迎えることを表す。

初九、拔茅茹、以其彙、征吉。

初九、茅を抜くに茹たり、其の彙と以にす、征くときは吉なり。

〔王弼注〕茅之為物、拔其根而相牽引者也。茹、相牽引之貌也。三陽同志、俱志在外、初為類首、已挙則従、若茅茹也。上順而応、不為違距、進皆得志、故以其類、征吉。

茅の物たるや、其の根を抜けば相牽引する者なり。茹とは、相牽引するの貌なり。三陽志を同じくして、俱に志して外に在り、初は類の首なり、已に挙ぐれば則ち従うこと、茅の茹たるが若し。上は順にして応じ、違き距むことを為さず、進めば皆志を得、故に其の類と以にす。

王弼注によって初九の爻辞を解釈すれば、おおよそ次のようになるであろう。

初九は乾卦三陽の首位にある。これが上に昇ろうとするとき、九二・九三の二陽爻もともに昇ろうとする。それはあたかも根のからみ合った茅の一本を引き抜こうとすると、他の茅も根ごといっしょに抜けてくるようなものであるという。しかも昇ろうとする下卦の三陽に対し、上卦の三陰は柔順に応じ、背き拒もうとしない。こうして三陽が結束して進むことで上下ともに満足するから、吉となるのである。

さて右の解釈に、前述の偽楚の乱の際、義挙を決行した劉裕とその同志たち、またこれによって救出された安帝と興復された東晋朝廷の像を重ねると、よく符合することに気づく。『易』の六爻には貴賤の位があって、初を庶人、二を士、三を大夫、四を卿、五を天子、上を無位の尊者（太上皇）あるいは王公に仕えない隠者の位に配する。劉裕の父翹は晋陵郡の功曹であった。裕はまぎれもなく貧士の出身であり、その同志たちも下級士族が多い。まさに泰の下卦三陽と符合する。一方、救われた朝廷の人士たちが柔順に裕に従ったことは、義挙以後の東晋の政情が明白に語っている。上卦三陰についての王弼の解釈のとおりといえよう。

以上により、「二月歌」の「三陽」の語に導かれて『易』の泰卦初九の爻辞とその王弼注にたどりつき、そこに劉裕の義挙とその後の朝廷の示す態度を象徴することばに遭遇することが明らかとなった。このことだけでも十分驚くに値するのであるが、さらに注目すべきは、次に示す六四の爻辞とその王弼注である。

六四、翩翩不富、以其鄰、不戒以孚。

六四、翩翩として富まず、その鄰と以にす。戒めずして以て孚あり。

〔王弼注〕乾楽上復、坤楽下復、四処坤首、不固所居、見命則退、故曰、翩翩也。坤爻皆楽下、己退則従、故不得富、而用其鄰也。莫不与己同其志願、故不待戒而自孚也。

乾は上に復るを楽い、坤は下に復るを楽う。四は坤の

首に処れども、居る所に固らず、命ぜらるれば則ち退く、故に曰く、翩翩たりと。坤の爻皆下るを楽う、己退けば則ち従う、故に富むを得ずして其の鄰を用うるなり。己と其の志願を同じうせざるは莫し、故に戒めを待たずして自ら孚あるなり。

王弼の解釈の要旨を説明しよう。

四は坤卦の首位にあるが、その位に固執せず、命ぜられれば退く。それはあたかも鳥が高い所から翩翩と軽快に飛びくだるようである。四が退けば、五・上の二陰もよろこんでついて来る。四が富んでいなくとも（「不富」とは陰爻についていうことば）、また忠告しなくとも、たがいに志願をひとしくし、信頼してついて来るのである。

右の「翩翩」の語を以て形容された六四は、前述したように貴賤の位でいうと公卿に擬される。そして東晋朝廷におけるその該当者中には、当然宗室司馬氏の一族が含まれる。

一方、「二月歌」において「翩翩」の語を以て形容するのは鳥であるが、次句「道逢双燕飛」の双燕も「是の月や、玄鳥至る」（『礼記』月令・仲春之月）というように春の鳥として、鳥と一括してよい。この「二月歌」の歌辞と『易』の六四の爻辞、およびその王弼注とを合成した句が〈其三〉の「翩翩新来燕、双双入我廬」であろうと想定するならば、この二句の燕は司馬氏一族を寓意するとしなければならない。

要するに右の「新来燕」を、逯欽立の説のように安帝兄弟の比喩とする解釈は妥当ではない。それは他の視点からも指摘できる。逯氏は「翩翩新来燕、双双入我廬」の二句を安帝兄弟が尋陽に遷されたことを喩え、「先巣故尚在、相将還旧居」の二句を安帝兄弟が建康に帰還したことを喩えたとする。「旧居」を建康と解するとして、「先巣」はいったいなにを指すのか。またすでに見たように、「翩翩」は軽快に飛ぶさま、「双双」はつがいとなって次々に続くこと、「相将」は大勢が連れ立っての意で、いずれもよろこびやにぎわいを感じさせる語である。逯氏の解釈にはなじまないのではないか。

東晋末期、司馬氏一族に劉裕の迫害・誅戮を逃れ北地に逃亡する者が続出した。例えば司馬楚之の場合、叔父と兄とを殺されて寛陵蛮中に逃れ、従祖の司馬休之が劉裕に江陵で敗れ後秦に奔ると、衆を集めて復讎を謀り、長社（河南省）に拠ったのである。ことに安帝殺害後の元熙元年（四一九）には、劉裕の部将王鎮悪の弟康が金墉城（洛陽城西北角の小城。魏の明帝が築く。）を保守したのに対し、

東晋から逃亡した司馬氏一族の者が、これを包囲するという事件があった。『通鑑』元熙元年二月の記事を左に示す。

時に宗室多く逃亡して河南に在り、司馬文栄なる者有り、乞活千余戸を帥いて金墉城の南に屯す。又司馬道恭有り、東垣より三千人を帥いて城西に屯す。司馬順明五千人を帥いて陵雲台に屯し、司馬楚之柏谷塢に屯す。

右の史実によって〈其三〉の寓意の所在に達することができたのではないかと考える。

すなわち〈其三〉の「先巣故尚在、相将還旧居」という二句は、晋朝宗室の多数の者が、江南東晋の父祖の地を捨てて、西晋の旧都洛陽の地に逃れたことを寓意するものであろう。そのように解すれば、「翩翩新来燕、双双入我廬」の句は、永嘉の乱を逃れ江南の地に来て東晋を建てた司馬氏一族を指すと考えられる。詩中の「我廬」と「門庭」の語は、ともに江南東晋の領域（呉歌と西曲の故郷ともいえる）を比喩したものであろう。

要するに〈其三〉は、北来の司馬氏の東晋朝廷が、劉裕らの義挙により再興し、国家安泰の時を迎えるかと思われたのもつかの間のこと、劉裕の迫害に王室の一族は江南の地を捨てて旧都洛陽に帰っていった。あたかも渡り鳥の燕のように。それ以来、この江南の地は日々に荒蕪している。自分の司馬氏一族に対する愛情は変らないが、その人たちの気持ちはどうなのか、と問うて結ぶのである。

ここには棄婦の嘆きの歌に擬して、作者の南人としての誇りが、司馬氏をはじめとする渡江の北人に傷つけられたという、一種の複雑で苦い心情が感じられるように思うが、どうであろうか。⑥

五

『晋書』巻二十八「五行志」に、「（恵帝の）太安中、童謡に曰く、『五馬游いで江を渡り、一馬化して龍と為る』⑦と。後中原大いに乱れ、宗藩多く絶ゆ。唯だ琅邪・汝南・西陽・南頓・彭城同に江東に至り、而して元帝統を嗣ぐ」という。この渡江の五馬、すなわち司馬氏の一族が、劉裕の迫害を逃れ、再び北の洛陽の地に帰ったことを寓意したうた、それが「擬古」〈其三〉である。そしてその内容から、この詩は元熙元年（四一九）二月の江南の地を逃れた司馬氏一族が洛陽に集結した事件にちなむ作ではないかと推測される。これは劉裕が恭帝から禅譲されて帝位に即く宋の永初元年六月の前年に当たり、まさに東晋最後の年である。

ところで改めて問題とすべきは、一般に宋・斉代の歌曲とされる西曲中の一曲「月節折楊柳歌・二月歌」を、陶淵明がどのようにして受容していたかという点の解明である。

王運熙の前掲書に次のようにいう。

《月節折楊柳歌》十三首、均為五、五、五、三、五、五句式、大概民謡原有此種格式、楽曲的歌詞摹仿它的（《月節折楊柳歌》可能是被潤色了的民歌）。（「呉声西曲的産生地域」）

「月節折楊柳歌」十三首はみな「五・五・五・三・五・五」の句式であるが、この句式はおおむねの民謡に共通のもので、「月節折楊柳歌」もそのもとづく民謡があり、その歌辞も原歌のそれを取り入れているであろう、という。

右の論を踏まえて考えるならば、陶淵明は「月節折楊柳歌」の前身たる民謡を受容していたと推測することができる。小稿で検討したように「月節折楊柳歌・二月歌」と〈其三〉とが、深い関連をもつことはほとんど疑いようがないといえよう。

注

① 『易林』や『周易』およびその王弼注と陶淵明の作品との関連については、以下の拙稿を参照されたい。「陶淵明『擬古』九首其一の表現手法と寓意について」（『中国文化　漢文学会会報50号』一九九二年六月）「陶淵明『乞食』の詩の寓意について」（『同上51号』一九九三年六月）「『飲酒』〈其五〉の詩の一解釈―その帰鳥のイメージと『易』との関連を中心として―」（『中国文化―研究と教育―　第五七号』一九九九年六月）「陶淵明の『飲酒』の詩題の典拠とその寓意について」（『六朝学術学会報　第一集』　一九九九年十一月）

② 増田清秀『楽府の歴史的研究』（昭和50年　創文社）の「第六章　清商曲の源流と南朝の呉歌西曲」および王運熙『楽府詩述論』（一九九六年　上海古籍出版社）の「上篇　六朝楽府与民歌」を参照。

③ 小川環樹『唐詩概説』（一九五八年九月、岩波書店『中国詩人選集』別巻）の「第七章　唐詩の語法、一　実字・虚字・助字・詩語」の項を参照。なお、「相将」は、「相い将に」の外に「相将いる」「相将う」などとも読み、虚字と解することもできる。

④ 王霙路『六朝詩歌語詞研究』（一九九九年、黒龍江教育出版社）の「故尚」の項に「〝故尚〟謂仍然、依旧。《晋詩》巻十七陶淵明《読山海経詩》：〝精衛銜微木、将以塡滄海。形天舞干戚、猛志故常在。〟〝故常在〟猶上文之〝故尚在〟、謂依然存在。〝常〟与〝尚〟通、例略。」という。

⑤ 現存の資料の範囲であるが、はじめて陶淵明の作において見られ、また呉歌・西曲においてはじめて「子夜四時歌」に見ら

れる共通の措辞の主な例を挙げれば次のようである。適見・寒雲・遠風・当暑・寒衣・双双・君情・天色・但使など。なおこうした問題について、第三回六朝学術学会大会（一九九九年十月三十一日）において「陶淵明と呉歌西曲」と題して口頭発表した。

⑥　石川忠久『陶淵明とその時代』（一九九四年、研文出版）の「内篇　陶淵明の人と文学　第一章　陶氏という南人貴族」を参照。

⑦　『晋書』巻六「元帝紀」では、「五馬浮渡江、一馬化為龍」に作る。

（文教大学）